



連載

# ビブリア・トーク

-私のオススメ-

… 坊農真弓 (国立情報学研究所)

## ぼくの命は言葉とともにある

(9歳で失明 18歳で聴力も失ったぼくが東大教授となり、  
考えてきたこと)

福島 智 著

(株)致知出版社 (2015), 267p., 1,600円+税, ISBN:978-4-8009-1072-1



この書籍は幸福とは何かをご自身の体験に基づいて問うものです。著者の福島さんは9歳で失明、18歳で聴力も失った東大教授です。2015年、本誌56巻6号に「盲ろう者が見る世界—情報のインフラからコミュニケーションのインフラへ—」というタイトルの福島さんと私の対談を掲載させていただきました。私と福島さんの初対面は、2014年度に東京大学先端科学技術研究センターで実施されたソーシャル・マジョリティ研究会セミナー（主催：発達障害当事者 綾屋紗月さん）でした。私はこのセミナーでマジョリティはどのようにコミュニケーションしているのかについて、いくつかの事例とこれまでの考え方を挙げて説明しました。そこで福島さんは最前列で指点字通訳のお二人とともに座ってらっしゃいました。私の講演のテーマは「会話における3人目」でした。「3人目」というのは、話し手聞き手からなる対話ではなく、話し手と2人の聞き手からなる多人数インタラクションにおいて、重要になってきます。具体的には、次の話し手になるわけではなく、目の前にいる2人のやりとりを傍らで見ていく存在のことを指します。私たちは日常会話において、傍らの3人目として情報を得ることが多いです。コミュニケーションは話し手と聞き手二者だけに閉じられているのではなく、やりとりが聞こえる、見える範囲の人々に開かれています。福島さんは講演後、私のところにやってこられて「僕にとっても3人目は課題です」とおっしゃいました。そのときの私は福島さんの著作を存じ上げず、この発言の本当の意味するところが分かりませんでした。

福島さんは本書籍の中で、盲ろうになったときの状況を「真っ暗の宇宙にたった1人漂う私」と表現されています。まず最初にこの真っ暗の宇宙から福島さんを救ったのが「指点字」です。指点字は福島さんと福島さんのお母様が作った、指を点字タイプライターのキーに見立てて伝えるコミュニケーションの手段で

す。さらに福島さんを「新たな宇宙」に連れ出したのは、指点字通訳でした。指点字通訳は間接話法ではなく、直接話法で誰がどのように喋っているかなどの話者の独自の言い回しなども含めて表す方法です。たとえば、「君は22日におうちに帰るんですって」という表現が間接話法です。これを直接話法で表すと「M: I君はいつおうちに帰るの? I: うーんとね、22日に帰ろうと思うんだけどね」となります。指点字を受ける福島さん以外の人間同士のやりとりをそのまま伝えるというこの手法が、福島さんの友人が喫茶店で偶然に発明した指点字通訳でした。

指点字通訳の手法が構築されたこの状況がまさに「会話における3人目」を福島さんが再び体験した瞬間だったんだろうと、いまになって私は思います。指点字や盲ろう者が用いる触手話によるコミュニケーションは、相手の手に触れて情報を伝達します。相手と手と手を取り合ってしまうと、自然に二者対話の環境ができあがってしまいます。福島さんが再び世界とつながるためには、1人の他者と手を触れ合うのではなく、世界を伝えてくれる他者とつながることが不可欠だったのです。

この書籍は福島さんの豊かな読書経験も魅力の1つです。そして類い稀なる福島さんの文章力で展開される幸福論は、私たちが情報伝達やコミュニケーションを考え直す上でとても示唆的です。昨今、人工知能が世の中を賑わせていますが、人間がプログラムしたコンピュータが指点字通訳のように温かな血の通ったコミュニケーション支援をできるようにする日はいつになるでしょうか。コミュニケーションの本質を考えるためのヒントが詰まった本書籍をぜひお手に取っていただければと思います。

(2016年1月7日受付)

坊農真弓 (正会員) bono@nii.ac.jp

2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。2009年より国立情報学研究所・総合研究大学院大学助教。2014年より同准教授。多人数インタラクション研究および手話・触手話研究に従事。博士(学術)。